

実践報告：聖路加国際大学3年次学士編入制度 開始半年後から2年目前半における1年間のプロセス

著者	下田 佳奈, 川端 愛, 齋藤 あや, 堀内 成子
雑誌名	聖路加国際大学紀要
巻	5
ページ	68-71
発行年	2019-03-20
URL	http://doi.org/10.34414/00013652



短 報

実践報告：聖路加国際大学 3年次学士編入制度 —開始半年後から2年目前半における1年間のプロセス—

下田 佳奈¹⁾ 川端 愛¹⁾ 齋藤 あや¹⁾ 堀内 成子¹⁾

Practice Report : The Second and Third Semesters of the Four Semester Accelerated Bachelor of Science in Nursing Program at St. Luke's International University

Kana SHIMODA¹⁾ Ai KAWABATA¹⁾ Aya SAITOH¹⁾ Shigeko HORIUCHI¹⁾

[Abstract]

In 2017, Japan's first Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) program began at St. Luke's International University in Tokyo, and is now in its second year. During the second year several challenges became evident. The student's learning status diversified in the rapid and tight schedule of the ABSN's curriculum. In order to socialize students into nursing students thereby establishing their identities as nurses, the faculties should consider that students are exposed to the nursing culture for a very short time period compared to the traditional nursing student. Therefore, it is important that faculty provide individual support according to each student's learning pace taking their individual attributes into consideration such as age, former specialties, and job experiences.

Despite the year admitted, students needed to seek employment as graduation approached, and it was hard for them to be successful at both study and job-hunting. Students had difficulty determining their clinical interests in advance because unlike traditional students they had not experienced the clinical content. They would need assistance being placed in clinical settings that might also be fruitful places of later employment. Faculties could support and inform the students to select appropriate clinical settings as potential work-places, and advising them how to make greater use of their strengths.

This short report summarized the contents, actual situations and process of the second semester of the initial year and the initial semester of the second year of the ABSN program occurring from September 2017 to July in 2018.

[Key words] accelerated bachelor of science in nursing program, baccalaureate degree, nursing education, nursing students

[要 旨]

聖路加国際大学は、平成29年度より3年次学士編入制度を開始した。国内初の取り組みである本制度は、平成30年度、開始2年目に入った。速い速度と過密なスケジュールの中、学生個々における学習状況は多様化した。看護の文化に晒されている期間が短いことを考慮し、どのように彼らの看護職としてのアイデンティティを成熟させていくか、また、学生の年齢、以前の学習・職業経験等を加味し、通り一遍の対応でない個々の学習ペースに合わせた柔軟な支援が必要である。

また、入学年度にも関わらず、卒業前年度として同時に就職・進学活動を実施した。学習との両立が求められ、進路の選択に迷いが生じることがあった。学生自身が生活や特性等を加味して就職先を選択でき

るよう、幅広い情報提供と看護に活かせる強みを再確認できるよう助言する必要がある。

本稿では、開始後の報告第一報に続き、初年度入学者の1年目後期から2年目前期の1年間の実際と課題について報告する。

〔キーワード〕 学士編入、大学教育、看護教育、看護学生

I. はじめに

聖路加国際大学は、平成29年度より看護学以外の学士号を取得した者を対象として、3年次学士編入制度を開始した。国内初の取り組みである本制度は、平成30年度、開始2年目に入った。初年度入学者は卒業年次となり、また、新たな30人を2期生として入学者に迎えた。

開始初年度1年目前期では、看護の機能領域である“看護技術学”および“基礎看護学”、“生化学”“薬理学”“疾病・治療各論”など計17科目（33単位）を実施した¹⁾。また、前期科目の集大成として、本学の実習レベルIに位置付けられている“看護展開論実習”が最終週に実施された。同看護領域内における複数の科目を統合させた教授方法をとったことが特徴的であった²⁻⁴⁾。結果、短期間での学びにも関わらず、学生の学習成果および姿勢は良好であり、臨床指導側からも肯定的な意見が聞かれていた¹⁾。

1年目後期から2年目前期にかけては、より詳細な病態生理および疾患の学習が必要となる看護領域の学習が開始となった。従来の方と相違は、“成人看護学（慢性）”・“老年看護学”の2領域の統合、“周産期看護学”・“小児看護学”および“精神看護学”・“公衆衛生看護学”の2領域ずつが各領域を超えて統合した授業・実習を実施したことである。

また、学生は入学年度にも関わらず、卒業前年度として同時に就職・進学活動を実施した。

本稿では、開始後の報告第一報¹⁾に続き、初年度入学者の学習状況および進路選択について、1年目後期から2年目前期の1年間の実際と課題について報告する。

II. 1年目後期・2年目前期における科目の実際（平成29年度後期9月～平成30年度前期8月）

1. 複数の専門看護領域が統合された学習

1) 領域統合の実際（表1）

（1）成人・高齢者と家族の看護領域

平成29年度後期は、9月から10月上旬までの期間に成人看護学急性期に関わる講義と実習が先行し、その次の10月中旬から12月中旬までの期間に成人看護学慢性期および老年看護学に関わる講義と実習が配置された。つまり、成人・高齢者と家族の看護領域内で座学と実習とが

交互に繰り返される構成であった。この点について、学士3年次編入生からは、「座学から実習のサイクルが生まれ、効率的に集中して学ぶことができ、統合された理解しやすいカリキュラムである」との声があった。その一方で、「一気に多くを学ぶために深く落とし込めない」といった意見も聞かれた。

（2）子どもと家族の看護領域

「周産期看護学」および「小児看護学」においては、授業はそれぞれの領域が独立して実施し、実習において統合が実施された。

合計4週間の実習構成とし、そのうちの2週間を妊婦健診・NICU・小児外来・保育園などを含む計15の実習場所からの選択実習とした。さらに、残りの2週間を産科病棟および小児科病棟での受け持ち実習とした。妊娠から産褥・新生児期までの家族を対象とした「周産期看護学」と、乳幼児から思春期の子どもとその家族を対象とした「小児看護学」の継続した過程にある対象という連続性と共通性を理解することを目標としていた。そのため、カンファレンスおよびレポート等においても、2領域を統合した視点で女性と子ども、家族に対する看護について学生自身が評価を実施した。同時期に2つの領域を統合させた形で実習を実施したことから、家族形成に係わる時期の看護についてより深く学ぶことができたという声が聞かれた。一方で、ウェルネス思考が基盤にある周産期看護学と疾患を持つ子どもとその家族への看護である小児看護学の特徴を統合して考える困難さも聞かれた。

（3）保健福祉連携における看護領域

公衆衛生看護学と精神看護学Iの統合授業として2017年1月より合同演習が実施された。この演習では、精神保健、母子保健、障害者福祉領域の保健医療福祉に関する法制度とその活用方法を統合的に学習し、複合的な健康ニーズを持つ人々の生活を支援するために必要な知識、技術、態度の習得を目標に各領域で合同して演習を実施した。具体的な演習方法は公衆衛生看護と精神看護がブレンドされた3つの事例、法制度などを中心にした予習ガイドをもとに、「個人学習」、「小テスト」、「グループ演習」の流れで構成された。「個人学習」で事例、ならびに予習ガイドに沿って自己学習を行い、次に予習ガイドの範囲内での「小テスト」を実施、「グループ演習」では事例に対する具体的な支援方法など既存の法制度と結び付

表1 専門看護領域の統合（授業・実習）

	H29年度 前期	H29年度 後期		H30年度 前期
	レベル I	レベル II		レベル II
授業	基礎	成人(急性) 老年	老年 成人(慢性)	小児 周産期 公衆衛生・精神 地域・在宅
実習	基礎	成人(急性)	成人(慢性)・老年	周産期・小児 地域・在宅・精神



写真1 授業風景



写真2 演習風景

けながらグループディスカッションと発表を行った。各論の内容に関してはそれぞれの領域で授業を展開し、その後の実習も各領域が独立した形で実施された。

Ⅲ. 入学半年後で開始される専門看護領域の学習における課題

1. 入学半年後に急速に展開されるレベルⅡの学習

入学年度の前期、基礎学習を終えてから1ヶ月を空けずに、9月からレベルⅡ（表1）の科目が開始となった。各疾患を抱える対象者を全人的に理解し看護を考えていくためには、既習の解剖生理学や病態生理学の基礎的な知識が定着していることが前提である。間髪入れずにレベルⅠからレベルⅡに移行するという事は、高い学習目標への到達を高速に要求されるということでもあり、学生の戸惑いが見られた。例えば、看護過程の展開について挙げることができる。4年制の学生は、看護過程の展開方法について演習等で何度も繰り返し、多領域・長期間に渡って学習を重ねている。その後、さらに約半年間かけてレベルⅡの臨地実習を行う。しかし、3年次編入の場合は、入学年次前期にレベルⅠ、半年後からレベルⅡの科目の開始、そしてその1ヶ月後には最初の「成

人看護学」の実習をスタートした。そのため、看護過程の事例展開を実施する経験が少ないままに、知識の応用と対象者理解を実践の場で求められることとなった。

2. 学生の学習状況の多様化

前述のように速い速度と過密なスケジュールで進行する学習スタイルの中、学生個々における学習状況は多様化した。段階を踏んで学習を身に付けていくことが可能な学生と、看護・医療の学習への適応がままならず一定の場所で滞ってしまう学生がいた。短期間の間に大幅にステップアップせざるを得ないため、基礎学習に比べて学習状況に多様化がみられ始める時期である。3年次編入の学生の多くが、学習者としてのレディネスをすでに備えているため、提出された課題やグループディスカッションなどをみても主体的に学ぶことができおり、短期間で知識は確実に得ている。しかしながら、1年という短期間のうちに基礎科目から専門科目に移行するなかで、「深く落とし込む」といった獲得の実感を得ることは難しく、それぞれの学生に特化した学習支援が求められていると考える。

3. 教授側の課題

本カリキュラムの特徴は、短期間でありながら、順序性を保って理論と実習が繰り返されていくことである。しかし、そのようなカリキュラム内で学生の学習状況が多様化する中、教授においていくつかの課題点が挙げられる。

前提として、4年制の学生とは異なる学習プロセスを経ていること、また様々なバックグラウンドを持つ学生であるということを教授側が理解しておく必要がある。まず学習プロセスに関しては、看護の文化に晒されている期間が短いことを考慮するべきである。各々の学生は、入学前にそれぞれに築き上げてきたキャリアがあり、その上に看護のアイデンティティを醸成させなくてはならないが、その期間は限られており、通常よりかなり速いスピードでそれが求められる。看護とはどのような行為を指すのか、また「看護師のように考える」⁵⁾ ための臨床判断力を身に着けるということはどのような事なのか、これまでの学生自身の経験から変換していくには一定の期間が必要であると考え、2年の間にそれらの変換をどのように支援していくことが可能かを検討していく必要がある。専門看護分野の実習が行われていく中で、どのように彼らの看護職としてのアイデンティティを成熟させていくかが教授側の課題である。

また、学生のバックグラウンドについては、入学前までの専門や職業、およびその領域での対処方法が基準となっていることが多いことを考慮しておく必要がある。3年次編入の学生は年齢、これまでの学習・職業経験も幅広く様々であり、それらを通して物事を理解する傾向がある。看護の学習にも当然それらの経験が影響しており、通り一遍の対応でない個々の学習ペースに合わせた柔軟な支援が必要である。

IV. 臨地実習前に求められる進路選択

1) 学生の負担

4年制のカリキュラムでは、3年生前期からレベルⅡの科目が開始となり、3年生の後期には実習が終了する。そのため、多くの実習が終了した後に就職試験および大学院への進学等を検討することが可能である。一方、3年次編入の学生は、基礎学習の終了後に病院インターンの時期が開始する。また、多くの病院施設の就職試験期間は、レベルⅡの実習開始前・実習中と重なる。そのため、就職活動と学習との両立が負担になることに加えて、就職希望が実習を終えていない領域である場合、進路の選択に迷いが生じることが多々ある。本来なら、科目および実習を終える中で自身の興味対象を検討することが可能であるが、3年次編入の学生は、同時進行で実施しなければならない難しさがある。

2) 支援側の課題

3年次編入生が、病院説明会やインターンシップに参加し始めるのは、1年目の夏休み以降であり、これに合わせて情報提供をしていかななくてはならない。学生部では、これまで学部3年生を対象に、12月に“第1回就職・進学ガイダンス”を行ってきたが、首都圏にある病院の就職試験の時期が年々早まっていることを鑑み、2018年度は、学士編入を含む全3年生を対象に同ガイダンスを4月上旬に前倒しして実施した。

就職活動においては、就職先の選択および就職試験の対策について、助言することが多かった。就職先の選択に関しては、学生自身が自分の生活や体力、特性、選好を加味して就職先を選択できるように、大規模病院だけでなく、3年次編入生に関心と理解のある中規模病院に関する情報も含め、幅広く提供できるようにしておく必要がある。また、看護を学び始めて1年程で就職活動をしなくてはならない彼らにとって自分自身の何を看護に活かすことができるのかが見えづらく、就職試験の対策として、どう自己PRをすればよいのか、難儀する傾向にあった。これまでの経験を語ってもらうなかで、看護に活かせる強みを再確認してもらいながら、それらが履歴書に反映され、面接で言語化できるように助言する必要がある。

卒業後、博士前期課程の進学を考える場合、入試科目である英語がネックとなることがある。3年次編入制度では英語のクラスは開講されておらず、前大学で英語を履修して以来、英語に触れる機会のない学生もいる。進学が視野にあるなら、早期から計画的に語学を習得できるオプションを準備しておくことが望まれる。

引用文献

- 1) 下田佳奈, 川端愛, 齋藤あやほか. 実践報告：聖路加国際大学 3年次学士編入制度一開始から半年間のプロセス. 聖路加国際大学紀要. 2018；4：27-32.
- 2) 加藤木真史, 大久保暢子, 齋藤あや. 第3年次学士編入における形態機能学・形態機能学演習・ヘルスアセスメント方法論の統合－第1報 科目の全体構成－. 聖路加国際大学紀要. 2018；4：103-8.
- 3) 縄秀志, 佐居由美, 樋勝彩子ほか. 実践報告：聖路加国際大学第3年次学士編入制度一統合科目②の概要と課題一. 聖路加国際大学紀要. 2018；4：113-6.
- 4) 加藤木真史, 大久保暢子, 齋藤あや. 第3年次学士編入における形態機能学・形態機能学演習・ヘルスアセスメント方法論の統合－第2報 授業展開の紹介－. 聖路加国際大学紀要. 2018；4：117-21.
- 5) Tanner CA. Thinking like a nurse: a research-based model of clinical judgment in nursing. J Nurs Educ. 2006；45(6)：204-11.